『ありがとう』

作者　淺羽　一

目が覚めて最初に浮かんできたものは、どうしても手紙に書きたくなった言葉だった。
それが普段の夢のように消えてしまうことが恐ろしくて、顔も洗わずにペンを取った。
そして私は下手くそな字で手紙を書き出した。宛先は、全てを綴り終えるまでには自然と決まってくれるだろうと思っていた。
肌寒い朝だった。季節はもうとっくに雪の頃を過ぎていたのに、ちょっとゆっくりと息を吐けば、うっすらと白いもやが生まれそうだった。
背の低いベッドの傍らで、板張りの床の上に敷いた座布団に正座して、小さなテーブルと向かい合う。どうして正座なんてしているのか、自分でも分からなかったが、何故だかそれが一番相応しく感じられていた。
恋人は久しくいなかった。友人は皆遠く、家族はすでに去っていた。
人生は儚く、世界は寂しく、なのにどうしてなのか湧いてくる記憶は温かいものばかりだった。
ふと、手が止まった。そう言えば、自分にとって本当に大切なものは何であったのだろうかと。
愛だと即座に言えるほど、誠実な人間ではきっと無かった。この世は金だなんてうそぶけるほど、裕福な暮らしでもまるで無かった。人生の意味や価値の代名詞になってくれそうな実績も成果も、趣味でさえ存在しなかった。しかし、だとすれば一体、答は何であるのか。
私は悩んだ。それが解決するまで、指はたった一文字すら生み出せそうになく、その上、足は完全に痺れてしまったみたいに感覚を無くしていた。
思わず、恐怖した。もしもこのまま、正解を見つけられなければ、この身はもしかしたら惨めに飢えて死ぬまでこの場から動けないのかも知れないと。そんなことあるはずがないのに、それでも私にとってその考えはやけに真実じみていて、実際、心の片隅には「いっそ、それも良いかも知れない」と皮肉な諦観も浮かんできた。
だけど、私ははたと気付いた。まだ、死ぬわけにはいかない。なぜなら、まだ手紙を書き終えていない。
すると、その途端、私の脳裏に幾つかの光景が蘇ってきた。それは等しく、自分とは別の人間の出てくる映像だった。
あぁ、そうかと、私はどうやら知らぬ内に笑っていた。こんなにも嬉しくて、こんなにも気恥ずかしくて、何よりこんなにも切ない気持ちがあるだなんて、想像もしたことがなかった。
改めて、私は便箋にペンを滑らせ始めた。単語一つ、文節一つ、句読点一つ、きちんと頭で考えて記しているはずなのに、いつしか手は新たな—或いはすでに失われた—命を与えられたかのように勝手に動いている感じがした。
誰かに自慢出来る人生では無かった。むしろ、面白味に欠ける日々の連続だったと言った方が適切だろう。けれど、そうであったからこそ、何よりも大切なものは「出会い」だったと確信した。地味で冴えない人間だからこそ、そんな自らを時に愉快に、時に華やかに、時に情緒的に飾ってくれた人々との出会いが、つまりは己の一生を語る上で最も重要なものに違いなかった。
果たして、過去にしか、それも記憶の中に並ぶ自分以外の相手にしか輝きを見出せない

一生は、幸福なものであったのか、それとも不幸なものであったのか。おそらくそれは人によって回答の変わる疑問であっただろうけれど、少なくとも私には微塵も迷いを必要としない愚問だった。

私はただただ便箋を埋めた。背中がしっとりと汗ばむほどに、とにかくひたすら手を動かした。胸の中にある一切を文字に込めて、いや、文字に変えて、一つ残らずそこへ移してしまいたかった。そうすれば、仮に自身が消滅してしまったとしても、それはあくまでも肉体だけの話で、肝心な心は紙が崩れてインクの文字がかすれて消えるまで、長く長く在り続けていられるだろうと信じられていた。

私はようやく、それが遺書であるのだと、悟っていた。なるほど、だとすればそれはまさしく、自分のような孤独な者が最後に遺す手紙としてぴったりだった。

宛先は、さしずめ〈私が生きた、そしてあなたが生きる、この世界へ〉だろうか。手紙は過去に向けて送れない、それだけはかすかに残念だった。

朝が過ぎ、昼を経て、夜を迎え、そうしてまた朝が来て…。

ようやく私が全てを記し終えた時、そこには何とも間抜けな手紙が出来上がっていた。だって、あんなにも書きたかったはずの一節は、延々と綴られている文章の一番最後にちょこんと添えられているだけで、言い換えれば、手に重さを感じられるほどに束ねられた便箋も、詰まる所、そこに容易く集約されてしまうものだったからだ。とは言え、だからといって無意味な時間であったとは思わないが。

〈もしもこの口が後たった一言を紡いだだけで失われてしまうとしたら、私はきっと躊躇うことなく、こう告げるだろう―〉

何とも気取った言い回しかも知れないが、それでも、それは紛れもなく本心だったから。

私は最後の便箋の一枚だけを封筒に入れて、表に何も書かぬまま、封をした。そしてそれをテーブルの上に丁寧に置くと、上半身を倒れ込ませるようにベッドに戻って、目を閉じた。両足は一足先に眠りに就いてしまったみたいに、最早、僅かな痛みすら感じていなかった。

不思議と空腹感や疲労感はなく、穏やかな満足感だけがあった。だから私は欠片も不安を抱くことなく目を閉じた。

きっと素敵な夢が見られるに違いないと、予感めいた想いに胸が躍って、私はそれから四度も大きなあくびを数えなければならなかった。

〈了〉